



9 60 1 2 3 4 5 6 7 8 9 70 1 2 3 4 5 6 7 8 9 80 1 2 3 4 5 6 7 8 9



中村定文重



中村定文
俊

うみのま能因さ
長能アハシ奇ちつてん
流作のよよと
ゆきノシれよ
山石のみソシ
ちののかくちやふうてん
風船のすがりと
門柱のすがり
伊水波のすがり

うのくそ
すくすくの筋を復
土打たれ、引ふたる
手とゆりあせとまない
ひともつア
カチオウルハナリ
獅の筋育めよ
えもんじやもんじかな
ひもんじひもんじ
九首にて

第二

木のうつりよまや
枝の桐
あれどもよけり
をくしりとせむる
ともゆきの工あよをほ
九首にて

石翁主文

青流洞三幽祇室秀士肖像

達小祠于富岡
謚
祇敬靈神



そこへ林をうて

遠たどりのむじくの山に
年々をゆくとよもやこくす
吾そひひの所祇室
秀士ハ務區名山を遊歷して生涯旅を極む
ゆづる所す
かほれきのる湯を以ふる所著
してこすつり経をすれり、
のあらひて多ぬ所とさうれ事のみ多く
以秋ハ月十日雨をかう曉はせばのすまざ
古よりおひのよき人の命ハ雨のましまさず
うりよめおれ興業桂竹のりへとあつまつて

ひり。川舟うとうのをすま。河の底にありかが。
河の舟うとうよ利漕にて。芝浦うつむる船をふく
きもこうりて。舟舟もありやち。やと車より。紙
あはつ船くあらめび。

着すりとほ人のすぐ。やま方。海

人ふれ。傳うハとまく。日詔う。行ひ。予う
まね。船うから。行ひ。大い。とく。とり。あがり
ぬ。城あつり。下。川の。驛を。過。日。以。れ。十日
あまく。と。降。下。まく。雪。お。り。よ。か。ご。で。さ。や
いと。し。ん。う。舟。ちやう。す。ま。う。と。と。ま。う。と。と。

うと。す。日。お。や。と。ま。う。と。ま。う。と。ま。う。と。ま。う。と。
す。こ。と。う。あ。の。く。ら。し。い。て。旅。宿。み。ま。を。思。そ。
く。く。人。く。め。ま。る。い。ま。く。く。と。御。下。盈。の
ぞ。き。み。か。て。う。終。う。馬。と。ま。う。と。ま。う。と。ま。う。と。
り。た。う。と。ま。く。家。を。辞。と。自。を。ま。だ。岑。參。と
あ。く。わ。い。う。崩。う。ん。う。と。ひ。と。と。舟。ふ。か。ま。し。と。さ。
よ。そ。船。う。と。と。か。ま。る。海。乃。舟。と。ま。う。と。ま。う。と。
と。の。舟。本。固。十。二。天。と。と。う。り。舟。の。や。り。と
奥。す。と。舟。不。棄。と。と。道。遠。や。う。泊。ま。と。と。

自えのとみにまづ
御宿おとあくらう借か
ひくわゆる旅亭りょてい年ともと
十六日既しもやアシて旅たよれ日也よを武藏むさの國くに
をさりてアシみほくすいとるがアシて不可アシし
らぬ粟あわやアシとんよと是アシと猿さる粟あわ
りふよアシりアシヘリ

名アシめアシとアシ粟あわの様ようを

あら候アシ承アシりやアシる

十アシのアシ大アシ山アシ諸アシ名アシ河アシ名利アシの山アシ

千アシのアシ所アシかうりアシてアシよのりのりアシどく

一アシのアシつアシりアシちアシよアシやアシぬ子安アシよ
わアシふアシつアシがアシたアシきアシよアシる所アシと追アシる附アシ
脚アシ鳥アシは目アシあアシい崩アシりアシぞアシお尋アシ

重アシ井アシ觀アシ高アシ堂アシやアシる者アシとアシりアシねアシ向アシきアシ
りアシ堂アシ井アシおアシうアシこアシうアシぬ向アシきアシをアシ

こアシよアシのアシ高アシ澤アシりアシとアシめアシ

次のアシさアシみ川アシとアシか田アシ余アシ富アシとアシ萬アシ
長アシ山アシつアシうアシ仰アシうアシとアシうアシ傍アシ境アシとアシ
心潭アシ川アシ唯アシ白象アシ青蛇アシとアシ石画アシ不アシ題アシ
了アシのアシもアシるアシ一アシ岩アシとアシたアシうアシるアシ

てはつら遠くへゆきぬみうよ
トモ
うへてまくら枕やまめすとあくまきりつて
在せぬまきうち頭をうそひつてやうとる
身入に案内へる便のち村さん石をもつて
さうと旅の人へ所寄りむづくらして
さうぬ間袖をぬきぬ峴山れ墮波の碑も
えやんは旅りて所の墓前ちかくあけめ
あらざるまことにりうるや各々襟下に腰巻を
えりうるゝ醒まれどころとくぬまくわり

まうじとくすうかげる身生れは寝かす
りうつすまちとめぐるまくわいもあへて身生
身すいたやめゆり代きはくらすくやつて
まじまうるへ頭をかくしゆう沖をぬまく
聞く囊すいてもぬるに老病うり
つるぬるぬまくわとせぬ我御の身のまくは
たほまともとくへんとおもてのまくは
くすくまくとくとくとおもてのまくは
ひくまくぬちがを碍命お右へ体へ旅

硯をとどりひて墨かをひきらう 手も手一匁と
手づけはる

久の病や暮すすすゞりて道の事
彦雞を舞つてうきしめらむる絶句
二牧お風

少のうりて宗祇は河の古墳あり星
まとううけり苔うつみて文子すよさくさ
あくほ石せきてすぬまくゆく

逃げを余すは吹くれ秋の風

うねうね石霜萬つあるひ入りうねうね

なみへあらうとく散りひむりね戸拘やり
簾をあらうへつまゆめうりかくすりる
此庵もじきもふ者清潤をあつてくわくち
庭上りひくれば石をひておりたうら石霜け
ニヤモいりりぬ名と定めれすりてうら
数寄れユミアヒロシテひくとせひるよやく
ちいさきお佛と本のものおさひてまくまと
いそくあつらひまほのたまほはまゆれ額
をひくとてうどのみのめぐらわくらわの

中うち舟綱船は常ふうちもよし おのば
のうちもよし 月の國うらうへとくわぬ
生身のあきへ因縁山の後をくへつき
くよよつてよるがる累かへとうりぬゆ居
のうちぢりとすらやあそむくらうりいもく
きらめめりぬ位牌ア對面ト仕りするれもう
がよよせまねむひはうく済すまじと
うけ達なまし、前まきのわ、うよみもあひう
とよをぬ處のゆれをき所までよま
ぬ翁乃いりりちのく旅人の足をとめよ

経古人の跡をもつてよ旨と豈とも
きうちむやとよはゆれ古跡とよなむづ
うへいすれのまくまき誰くわづらふよ
きのまくまくづる
まちをく残すあらみや處の庵

享保十八年乙仲秋 あき洞
祇德稿

高祖法師像



晋王右军性愛鷁為山陰道士字
徑換鵝士得書為殊也仲水先生
素好古且耽風騷以為高祖玉法師
所書一軸寶秘珍褶有餘與依所
好以得之於是光士率諸名豪傑新
鮮瓊瑤之句而為冊款陳惠之謝
亦有金潤潔膠之文漫蹟一絕齋
以供胡盧云

自然齋主風騒家年澤傳未二百
賓酒為吟懷今尚古炎天梅葉為

誰香

園熙義收稿



月、秋風に照るる根、ふ家底

吉首筆は經典吾を愛す井曾夕匱下
わざめし、絶りて走りつゝはるが爲能乃
つあてて予すあぐりより人の句を
ちひそ駕けける中東あり以選の
後へすとせむかく、うれを誇る
のうれのうれり拂のりあつまく
トヨクシテ武能國すも、河ちのれ
あぐり不きよやとおのれの井曾公
のうれのうれり拂のり予すよしむらの
きくあぐり不きよのうれり拂のあづも

おまつりあるとてくらうとゆく

短筆聞之龍社

吟り詠るのよし日はすむかが水光
傍しておゆ一 沙の澤み鳥邦
廉の森の松の木にめけて空翠
あやしくあひぬれ而野也 鱼貫
あら代やちうほふ流一 手書 痴難
もくけむねく口上をつふ 執筆

下略

き序よひりて、被の筆を
吟賞せしむり自ら向也はれの
西深く重ねる蠻の文いとく
うるそひうるそ
手びりをよひりかみの内 岳火
焚てはるゝけり
もうつて一月を度るやあと曾
底あり候のキ連ぞもて
ゆきゆきゆき
義すきうち御半弓をつる 晓雨

あはれ人ればすとる奈落有事く

多き處へとまことに一物を送る

しと祝へてゆだつてゆる

主根は内家秋の季節舍まつ

ほれ候るまこと御みゆきし

まことふ萬葉抄下卷第

あれと無く

萬葉抄下卷第の萬葉抄下卷第

わざとしむきのゆゑ 無事すが

ひくさいつに何のゆより

後難

鳥邦

宗祇のつづらうじゆくもの
得てうとくおとこくのつらうじゆ
解へまよくまよくのあのお
娘アキラキアキラキアキラキ
児トシタヒイリハモトハモトハモト
モモトモモルハツンモモルハツン
モモルモモルモモルモモルモモル

あやうさあつて月の夜不魚貫

仲氏庵のりとハ舟よ難を加ふ
れり友より二十年來立てども
あくまへ道を好みむれりうり
おりてやと一旅このもの競を
きとあニふ年おとす月が経てから
ありうげくならむか向くを
ちあつ名づけ

尔

うちやまときを日紙花の上 空翠

○題 宗祇

家底はのま蹟をとそひア乳

一いづくち向よちめこすや
作りある

株主一筆附ありあくま唐松巒

大坂 芳室

日や桂をわづんの妙向ハ立東

乃は吟くへり

日や桂をわづく氣よ旅夜 封菊
おしと百満る座や草のふ 宗味
岩城をもとすやまの古桃

内

火の車よつゝ歌手 旅子うき 摂川

萬作ア筆もかくまへゆるせり

名と云後の方角抄也 代の内 擧遠

曰

まよやうよみをかむちだる舟
我らよの御也 榛乃山 許人
引箇くき乃無事也 おのすけ トロ
益人乃富すも一乘麻子也 紙遠

曰

ゆゑもゆく ちとうといつて唐の落 文國

祇公千載の後すあうむれり

才牛

もうひ見へ上総の浦川邊 青蘆

曰

桂男不勝なり宗祇の曰、若才牛

曰

傳曰宗祇自愛鬚毎以香而薰
者問之對曰吾未愛鬚也愛香

氣之常在焉尔

うれの匂いやすらんらふはる 祇長

老葉とくも

紙経風あり
墨の句の、ゆけよ萱草を象
とて書風ひゆうかう冉有
記いつれど尾聲ひ聲も
くもくもくもくもくもくもくも
くもくもくもくもくもくもくも
平入かく書り作る萬葉
句ともち小よ。あはるやう
すすり終はか乃つとあく
をととて一典十美と
うやうやあらわとおふ
れ行葉さらなりゆく
ひきくらねあそあ
もと葉りてくみあら家秋判

一葉ちる老のか

體

みやこや二百年

南樓

以一冉有延風のくめ防
山口アーティム秋の傳秋
之後六月草秋望の間
書

いせの海かくやゆは山口紀

半秋

題 種玉庵

自讚すくよすか

の往とあくみを下 妹の叫 汝光

汝光

題宗祇

老葉集はと筆りて
广常を松子へや早雪も沾山

百沢

妻艸に通付を終て山葉や
かども風に小旅く遊年
はすにとく病ひあすて
月の口と是とく君りて
俗角よつまくらゆくもあ
やまとあめく時ひ
思しやるみもくとく
沙雲を以幸すとある
中一露旅とりゆきを

うみがよからぬ度をやくよつ
あそびくらくとく旅く好むけりゆ
おれ年をもと事次愁つて今や
うき母のまくはる景くも旅の
まくらとくのあくは人よ
ノて以時の本意よしとふ龜
二年の初秋晦りとよ

回

常仙

竹を画りて圖りて月を望む月
湖十
あまくらむへいにせりゆくも
追刻りよろあまくも傳す草の月局庵

常仙

回 時々風流比摺一回もあ
とつて妙句をいふり合ふ
初音は早苗也 う聞け首貢稿

回

時々風流比摺一回もあ
とつて妙句をいふり合ふ

初音

早苗也

う聞け首貢稿

菊の色うすうすの聲やすみ衣 井調
旅人けす白守や 河の山八重子大牛

回

絶典をひらくや菊のうじ自ひ 白笥
詠歌も連歌も自ひとひとひとひとひと
絶典が一葉いとひや家作帳 千舍
歌うた うた是も宗祇のやどりび 指兩

園香

千舍

指兩

題宗祇

月夜あともう一つのうの
と一句のみ名義ひよかう
人口りやくも
テトトトお月のばよしや 月夜 宗瑞
うれきあえ興きの連詩のうた 尺

回

山毛櫟方角抄うその瓶すま
素九 瑞琳

素九

瑞琳

さのうすに田舎の夕浦の向すの
雨せあせめめとく

おのむる圓龜を三保れ帆しけ船 麦阿

古宗祇經典ひうち

享保十九甲寅仲秋

湖南亭輯之

題名月

名月や沙りぬ寒の山うづら
新月の半はくとやおもてに
移はゆの月と泊てりふの月
駒ハ跡よ葉りむらかみとく
名月や沙りぬよ海さる隅田川
一 漁音 峨波 半素 尾谷 老風

回

名月や金費モ ほるうへ
縁ゆの舟をくゆ 秋の月
金車 長鶴

回

さりとてふとよもよへてふるそば
あひ役乃あや観の海を高し

乱絮
百巻

回十三夜

えよ常を見ゆ
十三夜 安士
自古より是とりあつ
十三夜 柯木
十三夜我子の形育み
調柯

回

名ゆめり書を重うつて
名ゆやすらごすのゆうて浮

魚子
沾風

名ゆは其と燃ゆの木回う
いつよりれ世の雨うやうの月
名ゆやちろのねみねう
名ゆやねうの人にゆく人

回十三夜

一室うそ梅をよけむ十三夜
名ゆやほよおほれの飛あづ
竹良

回

名ゆや鴉をかく
名ゆや面 芳沢
葦の葉をかく
名ゆや白柏

芳沢
柏翌

名所アモリ布子ノアリ日暮アリ 本川

回

新月やまく一月の彦丸 大漁

回

虫アミ巻ル事アリクル日未か 南里
渕アミシテシ海アリスの月 沾羽
榮枝ハズ遠アリツノ月 千泉
名屋アモリトヨアリツノ十二天 風谷
名屋アモリトヨアリツノ向川界 銀鉤

名屋アモリトヨアリツノ漁光 漁光
名屋アモリトヨアリツノ山 漁友
萬葉生ル白山アモリトヨアリ馬 庭紅
笠村アモリトヨアリツノ所 八文

回

名屋アモリトヨアリツノ屋 育 十雨
投轄アモリツノ所

西ケアヌトヨアリツノ月 今宵 魯雞

カムシム大の里アリツノ月 梅雨
名屋アモリトヨアリツノ處アリ遠通リ 九臯

信州上田

梅雨

九臯

名もや峯あらすの小松しき 吴雪
名もや峰も枝く内 壁清 水如
名もや枝をやきさ 寂れ前 水亭
やうくとれぐら彈く子やるの月 水舍
自れや屏風うけむる名ふか 水雅
ナヌ壁障うづくそよの月 金井

日

名月や旭とる 所 梢兩
名月うらみるは候や海の面 魚文

名月やうれむ中よしねは影 竹堂
名月やうれむ時若代素 桐兩

日

名月や月にゆきうちも花をき
かくゆき鳥影やとりやるの月 江光
峰と心れ月絃 晴朗子騎西
子とつてめいは絃太鼓晴朝
晴りくをうつ色

速子呼まきうる 秋の月 波長
名もやもとわぬあら波光八歳

波光

燭も魚簾集解を以て唱
涼妹人あちの月東あ無

無聲啞と牛うらむかの月 被徳

回

身じよ虫ひまか所ひ
佐丹鬼貫

袖
名月やうづめの井戸は
さく艸

祇空居士

鳴年書辭生ふ常
歌り度く白神のあ編
牛ハ梓りうり後モ
所ゆく之の軀ハ市中よ
ありて筑前國道の
名城侵此道を辭
てすすります。此事のやうな
ことを市多作の代

此書は本以御用
根之本事主の利

門人安慶子跋

享保二十年春

芥澤彥七 啟

日本橋通二町目

東都書林

戸倉屋喜兵衛梓

